『アルカディアー幻想と政治権力』

三石善吉

第一章　問題の所在…武陵桃源とアルカディアー
第二章　非政治的人間とアルカディアー（以上『筑波法政』第一九号）
第三章　ドイツ…一九三〇年一〇月。迫り来る危機の予感。三人の「警告」。
第四章　ヒトラー政権の成立・「強制的画一化」・知識人の態度（以上本号）

第三章　ドイツ…一九三〇年一〇月。迫り来る危機の予感。三人の「警告」

一九三〇年一〇月一五日はウェルギリウス生誕の二千年目にあたる。ラテン系の国家では文化英雄あるいは民族英雄として大々的にその生誕が祝われた。ドイツでも幾つかの大学などで講演会などが持たれたようであるが、専門家の間ではともかく、一般的には、あまり人目を引くものではなかった様である。こと文学に関して極めて該博な知識を持つ浩瀚な書物、平井正『ベルリン　破局と転換の時代　一九二八～一九三三』にも、同氏『ダダ／ナチ　悲劇の

誕生　三　一九二六〜一九三二』にも、残念ながら、ウェルギリウスの生誕二千年には、触れられていない。[1]

さて、われわれはここで、この一九三〇年一〇月に書かれた三人の文章を問題にする。なぜ一〇月に書かれたことを問題にするのか？　それは、まず、上にも述べたように、この月がウェルギリウス生誕の二千年目に当たること、その前月九月一四日に国会の総選挙が行なわれナチスが大勝したこと、しかも、社会民主党の一四三議席につぐ一〇七議席（第三党の中央党は六八議席。なおナチス党はこれまで一二議席しか持っていなかった）を獲得したナチス党は、この一〇月一三日、改選後初めて開かれた国会に、全員突撃隊の褐色の制服に身を固めて威圧的に登場したこと、またさらに、世界恐慌の波がドイツに押し寄せつつあり、ナチスの大勝はその前兆であること、心ある者なら騒然たるこの社会情勢に何かを感じ取っているはずであるからである。[2]

なぜ三人なのか？　ここでとりあげる三人は、一人は詩人、一人は小説家、一人は学者である。三人はそれぞれ、自分の得意とする領域で、この騒然たる社会情勢にあるものを感じ取って警告を発した。しかも、その意志発表の形式に個性があり、かつ、当時すでに政治の舞台に登場してきたナチスに明確な危検を感じ取っており、しかもナチス掌権後の生きざまが全く異なっているという特異性があるからである。

この三人とはまず、一人は一〇月一日付けの『ヴェルトビューネ』誌に「最左翼で歌う」なる詩を発表したエーリッヒ・ケストナー、もう一人は一〇月一七日にベルリンのベートーヴェン・ホールで「ドイツの呼び掛け―理性に訴える」なる講演会を行なったトーマス・マン、もう一人は、一〇月一五日の「二千年目のウェルギリウス」を論じた

エルンスト・ローベルト・クルティウスである。もちろん、ウェルギリウスを念頭において書かれたものはクルティウスだけであり、まったくスタンスの違う三人ではあるが、そこに、ある共通したものが窺われる。ならば、その共通項とは何か。まず、ケストナーから見ていこう。

エーリッヒ・ケストナー Erich Kästner、一八九九年二月、ドレスデンに生まれ、ライプチヒ大学でドイツ文学、歴史学、哲学、演劇史を学び、一九二五年には「フリートリヒ大王とドイツ文学」で博士号を取得している。一九二八年には詩集『腰のうえの心臓』、児童むけ小説『エミールと探偵たち』、一九二九年には詩集『鏡のなかの騒音』などで一躍文壇の寵児に躍りだす。名作『ファービアン』、『点子ちゃんとアントン』が出るのは、この翌年の一九三一年のことである。一九三三年五月には『ファービアン』と四冊の詩集、上記の二冊および『ある男が報告する』（一九三〇）と『椅子の間で歌う』（一九三二）の二冊を加えて、全四冊が焚書にあい、「望ましからぬ、政治的に信頼の出来ない」作家としてマークされ、彼はユーモア物・児童物を書いて韜晦を決め込む。

さて「最左翼で歌う Ganz rechts zu singen」は『Weltbühne 世界舞台』誌一九三〇年一〇月一日号に発表された。訳は上掲平井氏の著作（『ベルリン』）に従うが、氏の省略した部分（※をつけた）はわたしの訳で補った。また〔　〕は訳者（平井・三石）の補足の注釈である。さて、詩は次のようにはじまる。

さあ明るく甲高い響きで打ち当てろ！
今や第三帝国がやって来る！

われわれの票集めに乾杯！
これが第一撃だった！

風向きが変わった。今はギリシャ・北方性の風がビュウビュウ吹いている。
ウォータンの雷にかけて、今や
民衆運動という愚行が始まる。

われわれの心臓は右にある〔しっかりしているの意味〕。
なぜなら、さもなければ彼らはわれわれに何も許してはくれなかった。
だが頭には何の意味もなかった。
頭ではドイツ人は撃つことができない。

ケストナーはナチスの運動が下からの「民衆運動」で、北方の「宗教」の衣をまとった、われわれの術語で言えば「千年王国」運動として展開されていることをはっきりと見抜いている。つまり、ナチスの運動は民衆の「頭」・「理性」に訴えるものではなくて、「感性」に・民衆の限りない「ルサンチマン（怨恨）」に訴えかけているものである事を見抜いている。

※この世には百万の賢者（millionenweise）の死ほど

立派なものはない。
産業界はわれわれに新しい銭と
新しい武器を原価で頒けてくれた。

われわれはパンは要らない。必要なのはただ一つ、
国民的名誉！
われわれは英雄的な死も必要だ。
そして大きな機関銃も。

※だからユダヤ人は追い出せ！
彼らを遠くへ追放せよ。
ウルシュタイン〔出版社名〕のために死ぬのは御免だが、
キルドルフ〔企業家名〕のためなら喜んで死のう。

ドイツ人・「百万の賢者達」は、名誉のためなら喜んで死ぬ。ユダヤ人を追放し、武器をとって、第三帝国のために喜んで死のう！　これは痛烈な皮肉である！　なお、キルドルフはドイツ石炭シンジケートの創設者、「ドイツ重工業の主神ウォータンとも言うべき存在」、「あらゆる社会問題を解決するにはビスマルク流に、つまり社会的家父長制と残酷なエネルギー混ぜ合わせて組織労働者にあたらねばならない」との思想を持っていた。また、ウルシュタイン社は

当時のドイツの「自由主義」を看板とする大手の出版社（モッセ社やフィシャー社も大手）の名である。[3]

ドイツの波は高まる、
まるで樫の木のように。
そしてヒトラーはうってつけの人だ。
かれは波の上で泡を立てる〔大言壮語するの意味〕。

※国会はブタ小屋だ、
ブタはそれをごぞんじない。
雷のようなわめき声が響きわたる、
十字架の天蓋の国会〔鉤十字の支配する国会の意味〕。

われわれは国家より遥か以上に
独裁が必要だ、
ドイツの男たちは要するに、
厳命しかわからない。

※人が回転するように、
まずお前たち従者には革命が必要だ。
そしてドイツが奈落に落ちるなら、
万歳！　やった！
その時は正にドイツも終わりだ。

確かにケストナーは「詩」という表現形式で、解りやすくドイツ人の「感性」に訴えている。しかしこの詩のもつ痛烈な皮肉、痛切な警告を理解するには、「感性」だけでは駄目で、やはり「理性」が必要である。ケストナーの捉えた一九三〇年一〇月とはナチスの「千年王国的民衆運動」が、今や、全ドイツを席巻しようとしているとの危惧であり、これへの警告である。

エルンスト・ローベルト・クルティウスも、やはり、ドイツ人の「理性」に訴えた。彼は「二千年目のウェルギリウス」を純学術的に論じつつ、ケストナーや次に述べるトーマス・マンとは違って、「間接的に」ナチスを批判した。Ernst Robert Curtius、一八八六年四月、アルザス生まれ。シュトラースブルク、ベルリン、ハイデルベルク大学でロマン文学をまなび、一九一九年、ボン大学の助教授、二〇年マーブルク大学正教授、二四年ハイデルベルク大学、二九年にはボン大学に戻り、以後ずっとここで活躍することになる。処女出版（一九一九年）の『新しいフランスの文学開拓者』で注目され、二三年に『バルザック』、二五年に『新しいヨーロッパにおけるフランス精神』、一九三二年にはナチス批判の書・警世の書『危機に立つドイツ精神』を出版し、ナチス政権下では「好ましからぬ人物」とし

てマークされることになる。[4]

さて、「二千年目のウェルギリウス Zweitausend Jahre Vergil」の要旨を「牧歌の世界」というわれわれの文脈に引き付けて要約して行こう。現在『ヨーロッパ文学評論集』に収められている。[5]

ウェルギリウスの二千年目の記念祭をなぜ祝うのか？　それは彼の「偉大性」と「重要性」による。ドイツではこれまでウェルギリウスに対してやや「疎遠」であったようであるが、「より深い理解が私達のあいだで目覚めつつあるらしい」。ウェルギリウスの「根本意志」は、「すべての変転を通じて永続するものを保持すること」、「牧歌」について言えば、「同一性」と「安定性」へ欲求である。ウェルギリウスとアウグスティヌスとの関係から、彼を「国家の詩人」として見てはならないと述べ、次のような注目すべき発言をする。

> 国家の詩人の下には、より深い層のなかに、〝ローマの国事にも、滅びゆく国家にも（「農耕詩」二―四九八）〟心を動かされない瞑想的な芸術を愛する人間が生きているのである。彼は自分が単なる歴史的、政治的な領域から離れているのを知っている。この領域は本質的に不純で不吉であり、有為変転と神々の測りがたい怒りにさらされている。

この引用の部分「この領域（歴史的、政治的領域を指す）は本質的に不純で不吉」との一文に注意しよう。クルティウスは、このように書きながら、ウェルギリウスと自分を重ね合わせ、ウェルギリウスについて語りつつ、暗澹たる

時局に対する自己の感懐・思想をも間接的に語っていると見られる。彼のナチス批判は、この一九三〇年の後半から三一年末までに書かれ、一九三二年三月に出版される『危機に立つドイツ精神』に収録されることになる諸論文に明らかである。彼は現在の政治が「不純で不吉」であると判断し、「負け戦」を覚悟でナチス批判を敢行することになるのである。クルティウスの要約を続ける。

ところでウェルギリウスの最もひそかな憧れは「牧歌的」な「黄金時代」つまり「至福の閑暇」である。「〝閑暇〟(otium)はウェルギリウスの文学の鍵となる言葉の一つである」。この「牧人の世界」、「地上の天国」こそ、「私達の本性に生まれついている理想であり、私達がとっくに消え失せたものと信じていた歌のように、憂を帯びた幸福で私達を感動させるのである」。

彼は国家について、牧場について、愛についても歌ったが、その特質は「牧歌風の刺激」だけではなく、翻訳不可能なその「音の響きの快さとリズムの躍動」性にある。彼を時代環境の「徴候」として見るのは誤りである。なぜなら、彼の「偉大性」、「重要性」はその時代環境以上のもの、「ローマの永遠と永続するローマ精神の象徴的代表者以上のもの」である。クルティウスの文章を引用すれば、

彼は数千年を超えて西欧の精神的守護神であった。この世界史的な使命を彼はダンテにおいて果たした。そしておそらくさらに、何世紀か後にもう一度果たすであろう。というのは少なくとも私達の大陸の今日の荒廃と困窮のなかから西欧の将来の芸術と宗教の再建者を求める私達の希望だけは禁じようがないからである。

ここでクルティウスは、ウェルギリウスが「私達の大陸の今日の荒廃と困窮」を救う「芸術と宗教の再建者」となろうと予言していることに注意しておこう。何気ない言葉であるが、ここにはクルティウスのナチス批判の精神が満ち溢れているからである。つまり、クルティウスのこの一文（ウェルギリウスが「芸術と宗教の再建者」との指摘）は、ナチスの「ゲルマン至上主義」を真っ向から否定するものであって、これと全く同じ思想、全く同じ精神を、この一文を綴ってほぼ一年後の一九三一年の後半、クルティウスは『ノイエ・ルントシャウ』に「教養の解体と文化への憎悪」を書き、その中で、「狂信者たちはドイツの魂が南方のセイレーンの叫び声、古代ギリシャ＝ローマの異質の範例によって惑わされたを憤慨する」けれども、「ドイツの魂」は「古代ギリシャ＝ローマ世界とゲルマン的世界とキリスト教」の三者の「協力」によって成り立っている、と指摘したのである。明らかにクルティウスはウェルギリウスを語って「古代ギリシャ＝ローマ」の世界を称揚し、ナチスの「ゲルマン至上主義」・「北欧」主義とその「野蛮性」を告発し、かつ警告しているのである。

また、同じこの論文（「教養の解体と文化への憎悪」）のなかで、クルティウスは次のような卓抜な主張と提案を行なっている。つまり、「シュプレヒコールと突撃隊の時代には、ファウストとウィルヘルム・マイスターはその権利を失った。彼らは上から暗示的に強制される思想の前に後退せざるをえない」。なぜか？　今やドイツには「政治に見られる恐るべき思想の貧困」、「頑な民族主義的な空騒ぎ」が進行しているからであると指摘し、その対策として、数百万の知的な失業者達による「ドイツ民族の教養のための十字軍」を起こせと主張しているのである。(6)

ここでは、クルティウスが、ドイツの教養層の解体、ナチズムの空騒ぎと思想的貧困を指摘していること、それに

もかかわらず、ナチズムの「空騒ぎ」に対置する教養層による「十字軍」を（「負け戦」ではあろうが）提唱している事を記憶にとどめることにしよう。

クルティウスは、ケストナーと同じく、教養層の「理性」に訴えている。教養層の「理性」の存在をともかく確信し、「負け戦を戦うことは無価値な事ではない」、「〝たとえこの世界が悪魔で満たされていようとも〟証言しなければならぬ時がある」事をはっきり悟っている。だが、そもそもドイツ教養層はいまや解体に瀕している。完全に解体してしまったとは言わないにしても、果たしてこの時点で、教養層に「十字軍」を呼び掛けても、そもそも呼応してくれる者が居るのであろうか？　これについては、次のトーマス・マンの所でさらに触れる。

なお、クルティウスのこの文章では、「閑暇・安らぎ otium」を合い言葉とするウェルギリウスの理想郷に注目しておこう。クルティウスはこの「牧人の世界」の理想郷を上に見たように「黄金時代」、「至福の閑暇」、「地上の天国」とか「エリュージウム（極楽）」と呼んでいるが、この理想郷に名前を付けていない。このギリシャの理想郷に名前がつくのは、もうあと六年間の時の流れを必要とする。エルウィン・パノフスキーの有名な論文「われまたアルカディアーにありき Et in Arcadia ego」の書かれる一九三六年まで待たなければならない（後述）。しかもこの間には、ヒトラーの政権獲得、ナチズムによる「強制的画一化 Gleichschaltung」という想像を絶する事態が待ち受けている。しかし、この一九三〇年の中ごろの時点で、そのことを予見し得るものは誰もいない。ナチスによる文明の「野蛮化」の恐るべき「野蛮性」、その戦慄すべき具体的内容には誰もが想像すら出来なかった。

トーマス・マンはナチズムの台頭に本能的な危機意識を抱く。いや、マンのみならず、マンの兄ハインリヒもその

主義主張から、マンの子供たちエリカ、クラウスらはミュンヘンの喫茶店で口角泡を飛ばして下品に議論するヒトラー達に何度も出会い、強い嫌悪感を抱く。要するに最も典型的なドイツ教養層である「マン一家」は本能的・決定的にヒトラーを軽蔑し、かつその野蛮性の到来に強い危惧を抱いている。

Thomas Mann、一八七五年六月、豪商の子としてリューベックに生まれた。最初の長編小説『ブッデンブローク家の人々』（一九〇一）についで、短篇『トニオ・クレガー』（一九〇三）、政治論『非政治的人間の考察』（一九一八）、小説『魔の山』（一九二四）などの問題作を次々と発表し、一九二九年一二月には『ブッデンブローク家の人々』でノーベル賞を受賞した。（『魔の山』で受賞したのでは無いことに注意すべきか？）ところで、一九三〇年四月には小篇『マーリオと魔術師』を発表し、『魔の山』のナフタの「一人一殺」思想そのままに、「最もすごい催眠術師」・「独裁者」である魔術師チポルラの暗殺を肯定した。勿論これはヒトラー暗殺を肯定したものであると理解されても仕方がない状況設定であった。(7)

トーマス・マンは一九三〇年のこの時点で五五才、ノーベル文学賞受賞の、すでに押しも押されぬ世界的な大作家であり、かつナチスの最も手強い相手である。ヒトラー政権獲得後には、マン一家は承知のように皆、国外に亡命せざるを得なくなっている。

さて、この年の一〇月一七日、マンは「ドイツの呼び掛け…理性に訴える Deutsche Ansprach…Ein Appell an die Vernunft」なる講演をベルリンの声楽学校のベートーヴェン・ホールで行なった。彼は次のように語りはじめる。

聴衆のみなさん、今晩私の言葉を聞いてくださるようお願いして、場合によっては気紛れとも思われるような挙に出たことに、みなさんの理解が期待できるものなのかどうか、私にはわかりません。

解りにくい出だしであるが、マンはここで、講演の計画変更に対する弁明を行なっている。当初の計画では、自分の小説の一部を朗読するという「楽しい催し」を考えていたようであるが、それを突如変更して、このような講演に変えたのを、どうか了解いただきたいと言うのである。マンはいきなり問題の核心を提示する。その大要。

いま現在ドイツに襲いかかり、九月一四日の結果をもたらした原因は、①経済的窮状——新しい経済危機の波、②外交上の挑発——ヴェルサイユ条約の圧力、③内政上の苦悩——議会主義憲法の三者である。これこそが、「センセーショナルな選挙結果を生み出させた」三大原因である。しかし、ナチス党が勝利したのは、「国民社会主義が今日示したほどに大衆感情を納得させる力と規模を勝ち取ることができた」のは、単にこの三つの原因だけではなく、ここに「精神の泉の中からある援軍が現われたから」である。ならば、その「ある援軍」とはいったい何か？　マンの指摘するその「援軍」は二つある。まず最初の援軍は、マンの言葉をそのまま引用すると、次のものである。

中産階級が経済的に没落した時には、この没落にある気分が結びつきましたが、それは知的予言、時代批判の形で没落に先行していた気分で、時代は変わった、フランス革命に始まる市民の時代と、その観念の支配する世界の終末が告げられているという気分であります。

これをマン自身の言い換えで説明すれば、この「気分」なるものは、「生命概念を中心に据えた非合理主義的反動」とも呼び得るものであって、「放縦なまでに自然崇拝的な性格、根本的に人間愛を敵視する性格、陶酔と呼べるほどにダイナミックな性格、絶対に拘束されることのない性格」、「熱狂的野蛮性」に他ならない。トーマス・マンはナチスの運動が「終末」感を根底にもつ・民衆の恐るべき「千年王国」運動であることを見事に洞察している。自然崇拝・人間愛の敵視・ダイナミック性・熱狂的野蛮性などの特徴は、この前年の一九二九年にカール・マンハイムが『イデオロギーとユートピア』の中で説き明かした「アナバプティスト」の熱狂的な「千年王国」運動の特徴そのままであり、美事な分析といえる。さて、「援軍」の第二は、マンの言葉で述べれば、

> 大学教授の間から生まれたある種の言語学者イデオロギー、つまりゲルマン学者ロマン主義や北欧信仰もあって、これが、人種的、民族的、同盟的、英雄的などといった語彙をまじえ、神秘的で荒削りな、ひどく趣味の悪い響きをもつ慣用句を使って、一九三〇年のドイツ人に説教を垂れ、教養のよそおいをもつ熱狂的野蛮性という成分をあの運動に加えてやっています…

この第二の「援軍」は要するに「ゲルマン至上主義の神話」と要約してよいであろう。具体的には、この年（一九三〇年）の二月に出た、ローゼンベルクの『二〇世紀の神話』などが念頭に置かれていると思われる。さて、始めに述べた経済的危機と内政・外政の三原因とこの二つの「援軍」を得て、ナチスが第二党へと躍りだしたわけであるが、これによってドイツは一体どうなったとトーマス・マンは診断するのか？

自由の理念から逃げ出した人類の、常軌を逸した精神状態に対応するのが、グロテスクな型の政治で、救世軍風の行動、大衆的発作、露店風の喧騒、賛美の叫びなどをともない、托鉢僧のように、みんなが泡を吹きだすまで単調なスローガンを繰り返します。狂信が救済原理となり、感激が癇癪性の恍惚となり、政治が第三帝国あるいはプロレタリア的終末論の大衆アヘンとなって、理性は面をおおいます。これがドイツ的でしょうか？

この狂言、手足をふりまわすこの無分別さ、理性、人間の尊厳、精神的姿勢を否定するこの乱痴気騒ぎ、こうしたものがドイツ人の心情のどこか深層に本当に内在するのでしょうか？

トーマス・マンはドイツの市民階級が経済的にも精神的にもすでに雪崩をうって崩壊しつつある事を、「理性に訴える」相手がすでに消滅しつつあることを、はっきりと感じ取っている。平井正氏が、したがって、次のように述べたのも、一理はあるように見える。「しかし、〝理性に訴える〟とは象徴的である。人間は〝理性〟ではなく、〝ヴィジョン〟によって生きる存在であることを明白に示してくれた相手に向かって、理性に訴えるとは、これ以上の的外れがあろうか？」[8]と。

だがしかし、この平井氏の発言は、いささか「的外れ」ではあるまいか？　トーマス・マンは、ケストナー、クルティウスと同じく、すでに「市民階級」・「教養層」が、崩壊しつつある事をはっきりと認識し、かつ、にもかかわらず、ケストナーやクルティウスと同じく、「負け戦」を戦おうとしている。時代の証言者と成ろうとしているからである。

トーマス・マンの、ナチスにとっては極めて「挑戦的」とも見えるこういった言辞に対して、ナチス側や中産階級・

市民階級はいかなる態度をとったであろうか？　実は、この講演会は大混乱が発生して、マンは危うく危機を脱出するのであるが、この講演会の荒れ模様はどのようであったのか？　出席した聴衆、そしてこの事件を報道したジャーナリズムやナチス側の反応はどうであったのか？

講演会妨害の有様については、双方の側からの記述がある。トーマス・マン側の見解は、著名な指揮者ブルーノ・ワルターによれば、次のようになる。トーマス・マンの講演会は、

…聴衆のあいだに張り込んだナチ党員の野次や怒号によって、威嚇的な妨害を受けたのであった。デモンストレーションの指揮をとっていたのは、大きな黒眼鏡で顔を半分かくした《詩人》アルノルト・ブロンネンであった。そのためにマンはかき消されがちな論述をアッチェランドで終わらせ、ホールを去らなければならなかった。まったくほっとしたのは彼の出版社S・フィシャーの夫人だった。彼女は最前列の中央に座って、ふるえながら「できるだけ早く終わりになさって」とくりかえしマンに囁きかけていたのであった。彼が演壇をおりるや、妻と私は危険な聴衆との接触から彼を守るためにいそいで駆け付け、彼とその家族をベートーヴェン・ホールの楽屋から、私のよく知っている連絡通路を通って、隣接するフィルハーモニーの建物へ導き、そこの暗いホールを手探りで抜けて、ケーテン通りに面した出口にたどりついた。私は不吉な予感から、そこの中庭に車を待たせてあったのだが、このおかげで私たちは身の安全を守ることができた。

さて、この講演会妨害の首謀者と目された、アルノルト・ブロンネンは汚名を挽回すべく「自伝」を書き、この事件の有様を彼の側から語った。

ブロンネンは新聞でマンの講演会を知り、マンが社会民主党と共にファシズム打倒を主張するものと理解した。「私（ブロンネン）はファシストだった。それ以上に私はアナーキストだった」。そこでエルンスト・ユンガーに電話を掛け、フリートリッヒ・ユンガー、エトムント・シュルツ、ファイト・ロスコップの五人で出掛け、「討論を誘発しようと取り決めた」。講演の始まる数時間前に、ブロンネンはゲッベルスがブロンネンを支援するために二〇人の突撃隊員を派遣することを知った。以下ブロンネンの「弁明」である。

私は滅入った気持ちで満員のベートーヴェン・ホールに行った。というのは突撃隊のならず者がなにか馬鹿騒ぎを演ずることを恐れたからだった。しかし、最初は何事も起きなかった。そこでまもなく休憩になった。その時われわれ、とりわけロスコップが、彼の轟くような声で、短い野次を飛ばした。騒ぎになった。私の隣の男の力強い「オホー」という声が、ひどい騒ぎを引き起こすに十分だった。何百人もが後を振り向き、何人かは私に気付いた。いまやここかしこで、嵐のように警察を呼ぶ叫びが起こった。私は立ち上がって、こんな討論のやり方に抗議した。「警察以外の論拠を知らないとは、とんだ民主主義フォーラムだ」と私は嚙み付いた。それで喧騒がいっそうひどくなった。四方八方から人が私に摑みかかった。警察がホールに入ってきた。こぶしとゴムの棒がうなって打ち下ろされた。さまざまな激しい攻撃を予期して、私は落ち着いて私の片眼鏡をありふれた（紫外線よけの）ほとんど見えない程度に青みがかったゴーグルと取り替えた。それが後に私が巨大な青い眼鏡で変装したという伝説を生んだ。

ブロンネンによれば、警官は彼をホールの外に連れ出そうとしたが、彼の抗議でホールのドアの所に連れていかれただけであったようだ。ホールの中では、彼の言葉を引用すると「攪乱者がいなくなったにもかかわらず、妨害が続いていた。みんなが互いに叫びあっていた。二一人の人間だけが全く静かにしていた。つまり、弁士のトーマス・マンと借りたタキシードで座っていた二〇人の突撃隊員だけが静かにしていた。彼らはタキシードを汚しはしないかと心配していたのだった」。

翌日の新聞では、ブロンネンを「文学的機動隊の指揮者」と中傷する論調が「あめあられと降り注いだ」ようである。ブロンネンの「自伝」によっても、「突撃隊のならず者がなにか馬鹿騒ぎを演」じたのではなくて、どうみてもブロンネン自身が「馬鹿騒ぎ」を作り出したとしか思えない。聴衆の行動も、また警官の行動から推しても、ブロンネン自身の文章から判断すると、皮肉なことにブロンネンらに対する非難の行動だったようだ。聴衆は基本的にはマンの論調を支持するものであったと判断できる。新聞の論調も、これまたブロンネン自身が証明しているように、ブロンネンを非難した。ここでは、まだ、市民的教養層の「理性」は、今や危胎に瀕しつつあったが、なお健全に作動していると見て良いのではなかろうか？　「理性」を持った市民は、マンを非難するブロンネン達を行動で非難したのである。しかし、この「理性」は、クルティウスの提唱したような反ナチスの「十字軍」を形成できなかった。世界恐慌の波がドイツを襲いはじめると、中産階級は雪崩を打ってナチス支持に傾斜していくのである。

そして、この三人、ケストナー・クルティウス・マンはナチスの政権獲得後は、全く違う三様の生きざまを示すこ

とになる。まずケストナーはナチス批判が出来なくなって批判の矛先を収めて（!?）児童ものに傾注して「第三帝国」を韜晦して生きぬく。ついでクルティウスは全く純学問的な文献学の領域に身を潜めつつ「アルカディアー」を追求して、畢生の大著『ヨーロッパ文学とラテン中世』[9]なる作品の完成に傾注してやはり「第三帝国」を生きぬく。他方トーマス・マンは「国外亡命」を余儀なくされ、全く異なった・ドイツ語の全く通じない世界に住み、反ヒトラーの言論キャンペーンを展開する。もちろん、「亡命」とは元来は「国外」に「亡命」することを意味するが、ここでは「国内亡命」と対比させて「国外亡命」としよう。

ところで、以下の論述では、「国外亡命」のトーマス・マンは論じない。そうではなくてクルティウスに代表される所謂「国内亡命 Innere Emigration」・「精神的抵抗」を行なった人たちの「生の軌跡」を追求する。マンの言葉を使えば「魔女の饗宴」に参加し、「悪魔どのに奉仕していた」と言われてしまった人達の生きざまを追求する事になる。本当に「悪魔どのに奉仕」したのかどうかはこれからの論述で明らかになるが、ともかく、「アルカディアー」とは、まずは、このように国内にとどまった、「理性」ある人びとの、精神的抵抗の知的格闘を表わす概念とする。こういった批判的知識人の生きざまを知るには、その前提として、一九三三年一月から七月までの、ナチス掌権直後の、ドイツ国内の政治状況を簡単に述べておかなければなるまい。ドイツの国内に留まった人達は、極めて短期間の間に、専制的・全体的国家の、想像を絶する「強制的画一化」に直面するのである。

〈注〉

（1）ラテン系国家の一例として、メキシコのアルフォンソ・レイエス「ウェルギリウスをめぐって」、『世界批評大系三 詩

論の展開』（筑摩書房、一九七五）四〇頁以下参照。また小川正広『ウェルギリウス研究　ローマの詩人の創造』（京都大学出版会、一九九四）一四頁。また世界各国で出版された生誕二千年記念の出版物の目録は、小川氏同書三五頁によれば、F. Peeters, "A Bibliography of Vergil", (Roma, 1973) があるというが未見。平井正『ベルリン』せりか書房、一九八二、同『ダダ／ナチ』せりか書房、一九九四。

(2) 一九二八年五月と一九三〇年九月の総選挙の間にシュトレーゼマンの人民党（大中工業を代表）が四五から三〇へと一五議席を失い、民主党（中産階級、知識人）が二五から二〇へと五議席を失っていて、ナチス党に流れたものと判断される。中産階級の雪崩現象が起き始めている。この両党の凋落は劇的で、一九三二年七月の総選挙では人民党がさらに二三議席を失って七議席に、民主党はさらに一六議席を失って四議席に落ち込んだ。最も決定的なのは学生の動向で、一九三〇／三一年の冬学期の学生自治会選挙では、「ナチス学生同盟」が反ユダヤ主義、反ヴェルサイユ条約を掲げて、ほぼ「大学の征服」に成功する。ナチス党の政権掌握に先立つこと二年前に、早くもナチス党は大学で指導権を掌握してしまった。学生の裏切りである。これは暗い予兆であった。望田幸男・田村栄子『ハーケンクロイツに生きる若いエリートたち』有斐閣選書、一九九〇、二一六頁以下参照。山本尤『ナチズムと大学』中公新書、一九八五、一七頁。

(3) キルドルフについては、ハルガルテン『ヒトラー・国防軍・産業界』富永幸生訳、未来社、一九八四、九二頁、ウルシュタイン社（ユダヤ人経営）については、ピーター・ゲイ『ワイマール文化』亀嶋庸一訳、みすず書房、一九七九、一六四頁、山口知三他『ナチス通りの出版社』人文書院、一九九〇、八〇頁他。

(4) 『危機に立つドイツ精神』（南大路振一訳、みすず書房、一九八七）は一九三二年一月一八日の序文があり、恐らく三二年三月に出版された。

(5) 『ヨーロッパ文学評論集』川村二郎他訳、みすず書房、一九九一、原書一九五四。なお「二千年目のウェルギリウス」は "Neue Schweizer Rundshau", XXIII, 1932, に載ったもの。

(6) 『危機に立つドイツ精神』一三、一四頁。なお下文の「負け戦…」はクルティウス『読書日記』生松敬三訳、みすず書

房、一九七三、八二頁。

(7) 『マーリオと魔術師』(Mario und Zauberer) 一九三〇年四月。『トーマス・マン全集』第八巻、新潮社、一九七五、五三三頁以下(高橋義孝訳)、『新潮世界文学 三五 トーマス・マン』Ⅲ(高橋義孝訳、一九七一)所収。一九三〇年一〇月一七日の講演は新潮社の『トーマス・マン 全集』第一〇巻、一九七二、五二二頁以下(森川俊夫訳)にある。

(8) 「理性に訴える…」とは「的外れ」は平井正『ベルリン 破局と転換の時代 一九二八―一九三三』せりか書房、一九八二、二八七~八八頁、ブルーノ・ワルターの文は同書二八七頁、ブロンネンの「自伝」も同氏『ダダ/ナチ 悲劇の誕生三 一九二六~一九三二』せりか書房、一九九四、三三八~三九頁。

(9) クルティウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一他訳、みすず書房、一九九一、原書一九四八)。マンの「魔女の饗宴」の「酒宴に参加して、悪魔どのに奉仕していた人たち」との指摘は新潮社『トーマス・マン 全集』第一一巻(一九七九)、「私はなぜドイツに帰らないか」、六六二頁参照。

第4章 ヒトラー政権の成立・「強制的画一化」・知識人の態度

一九三三年一月三〇日一一時、八四才(一九三四年八月一日没)、瀕死のヒンデンブルク大統領はヒトラーを首相に任命する。一九三三年一月二二日、ヒトラーはヒンデンブルクの息子オスカーを味方に付け、「あのオーストリアの上等兵を選任する気はない」と言っていたヒンデンブルクも、オスカー、フォン・パーペン、マイスナーという信頼する側近三名が口をそろえて、ヒトラーを首相にするように進言を繰り返せば、折れるのは時間の問題であった。一月二九日、ついに老ヒンデンブルクは「オーストリア人上等兵」を首相に任命する気になった[1](もちろん、この事態に

至るまでには、フォン・パーペン、フォン・シュライヒャーなどの私利に絡んだ謀略、ドイツ産業界の利害などが有った)。この日、一月二九日、フォン・パーペンは閣僚の名簿を大統領に提出した。その顔触れは、

首相　ヒトラー、四三才、ナチ党。
副首相　フォン・パーペン、兼プロイセン首相、五三才、無所属。
外相　フォン・ノイラート、留任、五九才、無所属。
内相　フリック、五五才、ナチ党。
蔵相　フォン・クロージク、留任、無所属。
経済相兼農相　フーゲンベルク、六七才、ドイツ国家人民党党首。
労働相　ゼルテ、工業家、鉄兜団の首領、五〇才、無所属。
法相　ギュルトナー、留任、五一才、ドイツ国家人民党。
国防相　フォン・ブロンベルク、五四才、参謀総長、無所属。
郵政兼運輸相　フォン・リューベナッハ、留任、五七才、無所属。
無任所相後航空相　ゲーリング、兼プロイセン内相、三九才、ナチ党。

ヒトラー政権はユンカーと重工業の、ヒトラー主導下の「右翼統一戦線」[2]であり、またナチス党とドイツ国家人民党の連合政権とも言える。また、その構成から「新右翼」のナチス党(三名)プラス「旧右翼」(八名)の連合とも言え

る(ゲッベルスが情報宣伝相につくのは三月一三日、これで四対八)。パーペンはこれでナチを押さえ、内閣の指導権を握れるものと確信していた。フーゲンベルクもパーペンが首相になり、自分が経済相になってドイツの経済を押さえ、ゼルテが労働相になれば、それで「ヒトラーの奴に枠をはめてやる」と自信満々であった。たしかに「その頑固頭でヒトラーに抵抗し、押し通すことだろうと思われた閣僚はフーゲンベルク一人だけだった」のであるが、パーペンら保守的政治家たちも、国防軍の将軍達も、ドイツ国立銀行総裁シャハトらの公人達も、すべてが、簡単にナチ＝ヒトラーを「抑制」できるものと多寡をくくっていたのである。かくて工業界はヒトラー政権を歓迎した。他方、中産階級は「三月の投降者」と呼ばれるナチス党への雪崩現象を引き起こし、一九三三年一月三〇日から五月一日(この日、入党制限がおこなわれた)までのわずか三ヵ月間に、党員八五万人から一六〇万人に、突撃隊員は五〇万人から四五〇万人に膨れあがった。

さて、このヒトラー政権を、誰もが、きわめて短命な政権と思った。シュテファン・ツヴァイクは、一九四一年アメリカのニューヘブンで『昨日の世界』(三)を執筆し、翌年一九四二年二月二二日には妻と共にブラジルのペトロポリスで自殺することになるのであるが、その「ヒットラー　ここに始まる」の章で、ヒトラー政権成立の時を次のように回想していた。

わずかな将軍職を除いては、ドイツでは国家の高い地位はもっぱら、いわゆる「大学教育を受けた」人々のために保留されたままになっていた。…公民教育にも終わりまでは通ったことのない、いわんや大学などは卒業して

おらぬ一人の男が、…シュタイン男爵とか、ビルマスク、ビューロー公が持ったような地位に近づくことができるということは、ドイツ人達にとっては全く考えられぬことであったのである。この教養の思い上りほどドイツの知識人を誤らせたものはなく、…ヒットラーのうちに…決して本当の危険となることはないと考えていたのであった。そして、彼が一九三三年一月のあの日の首相となったときにおいてすら、大衆の大多数は、…彼はまだ一時的にその地位を保つものであるとだけ見た。

ドイツ教養層は、ほとんどの人々がこの政権を「一時的」なものとみなした。ナチス党の真の敵、社会民主党や共産党すら、ナチ体制は「一時的現象」と過小評価し、「ファシズムの大衆欺瞞に対しては広範な反ファシズムの戦いを開始さえすればよい、そうすればヒトラーの支配も短期間の悪夢のような出来事にとどまる」と確信した。一九三三年五月一日にいたっても、なお、ドイツ共産党の「メーデーに対する党組織の指令書」は次のような戦術を取れるものと考えていた。(4)

メーデーの前夜不意をついて現われシュプレヒコールを行なう。

その夜の街頭をわれわれのスローガンによって革命的プロレタリアートのインターナショナリズム一色にぬりつぶす。

大衆を圧倒するような傑作を生み出す（赤旗を掲げ、煙突や橋にペンキで絵やスローガンを描く）。

しかし、事態はきわめて早く進行し、しかも最悪の事態を生み出していた。ナチスの「強制的画一化 Gleichschalutug」政策は、いくつかの「法律」と「焚書」によって、ほんの半年という極めて短時間の間に完成された。その中の重要な「法律」をあげると以下のものである。[5]

①一九三三年二月二八日、「民族と国家の保護のための大統領命令 Verordnung des Reichspräsidenten zum Schutz von Volk und Staat」、俗に「国会放火緊急命令 Reichstagsbrandverordnung」全五条。これは二月二八日の「国会議事堂炎上」を「共産主義者による国家転覆の暴力行為」として、反国家活動の全てを、「死刑」をもって取り締まるというもの。第一条には「…人身の自由の制限、意見の自由発表（出版の自由を含む）の権利の制限、組織・集会の権限に対する制限、信書・郵便・電信・電話の秘密に対する干渉、家宅捜査命令および財産没収命令、所有権の制限等もまた、これに関する一定の法的限界を適用されない」。

②一九三三年三月二四日、「民族とライヒの危難を除去するための法律 Gesetz zur Behebung der Not von Volk und Reich」、俗に「授権法 Ermächtingsgesetz」と呼ばれた、五条からなる法律で、首相のヒトラーに無制限の独裁権を与えるもので、その第三条「ドイツ国政府が決議したドイツ国法律は、総理大臣がこれに手を加えて、完全ならしめた上、ドイツ国法律公報をもって公布する」。

③一九三三年四月七日、「職業官吏制度の再建のための法律 Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums」、別名「職業官吏法 Berufsbeamtengesetz」なる法律で、官吏と弁護士から、非アーリア人（有色人種、黒人、ジプシー、ユダヤ人）を追放するものであった。

④一九三三年五月一〇日、「焚書」。この日の夜八時、ベルリンのオペラ広場で二万五千冊の「非ドイツ的」書物

が火に掛けられた。マルクス、カウツキー、ハインリヒ・マン、ケストナー、エルンスト・グレーザー、フリードリヒ・フェルスター、フロイト、E・ルートウィヒ、W・ヘーゲマン、T・ヴォルフ、G・ベルンハルト、A・ケル、レマルク、トホルスキー、オシエツキーの書物である。焚書はドイツ全土二五箇所で一斉に行なわれた。

⑤一九三三年七月一四日、「政党の新たな結成を禁止する法律 Gesetz gegen die Neubildung Parteien」。全二条。

「第一条　ドイツ国内には唯一の政党として国家（民）社会主義ドイツ労働者党が存在するものとする」。これによって、ナチス党の一党独裁が可能になった。ナチス党イコール国家となった。

この①から⑤の措置はこれからほぼ一二年間続くことになるナチス体制の方向を集約的に示すものであった。つまり、ヒトラーの個人独裁・反共産主義・反ユダヤ主義・ドイツ的文化・ナチス一党独裁がこれである。しかしこの時点（ナチス掌権半年後）において、この法律が、いかなる現実的・実際的効力を発するものであるか、誰も想像すらできなかった。

今日の研究では、ナチスの「強制的画一化」は社会の底辺にまで貫徹したわけではないとされているが、しかし、この三つの法律でほぼ完全にドイツ人の自由の息の根は止められた。次には、この強制的画一化を拒否したものに、いかなる運命が降り掛かるのか、オシエツキーの場合を見よう。(6)

ケストナーと同じく『ヴェルトビューネ』誌などで、ドイツ人の「理性」に訴えつつ、ナチスを痛烈に批判した人に、著名な評論家・平和主義者、カール・フォン・オシエツキーがいる。一九三〇年六月一七日付けの『ヴェルトビ

ューネ』誌の「チャンピオン」なる文の一節に言う。

遂に一人の勝利者！まず、…親愛なるドイツの同胞よ、…微笑を控え給え。アドルフ・ヒトラーが吹き飛ばしてしまったのでない限りは、君の最後の若干の知性を守れ。ノー、ニューヨークでドイツの神が、ドイツの力が…勝ったというのは、マックス・シュメーリングのボクシング用グローブの中に、ルター、カント、ゲーテの精神がひそんでいたというのは、誇張である…。

マックス・シュメーリングは一九三〇年六月一二日、ニューヨークでボクシング世界ヘビー級チャンピオンのジャック・シャーキーに挑戦し、第四ラウンドで反則勝し、ドイツ人として初めて、ヘビー級チャンピオンとなった。

一九三〇年一二月一六日、オシエツスキーは、同じく、『ヴェルト・ビューネ』誌に、「レマルク映画」を書いた。一九三〇年一二月一一日、レマルクの『西部戦線異常なし』が上映禁止になったのである。これは「ドイツの敗北の映画」であり、「ドイツ国民を中傷した」との理由である。同じく平井氏の書から。

ある種の…平和主義的な考え方が…正当な刻印を見いだしたかどうかだけが、問題なのである。この考え方が…最近ファナチックな賤民の親衛隊によって…公にテロ手段でおどされ、それから怪しげな検閲当局によって、あっさり破棄されてしまった。…共和国は己れ自身のイデオロギーを見捨て、戦わずして、一つのポジションを明け渡した。…そして、レマルク氏自身は、どこに隠れているのか？　彼が公に目立つことを嫌っているのは、わ

れわれも知っている。…一人の作家は…公の力である。レマルク氏は決定的な段階で沈黙していた。…ファシズムは九月一四日に、最初の大きな勝利を得た。今日それは一つの映画を倒した。明日はなにか別のものになるだろう。

彼は、すでにワイマール時代一九三二年四月から八ヵ月、「国家反逆罪」で投獄され、ヒトラー政権成立直後の一九三三年二月には、今度はナチスによってノイマルクトのゾンネンブルク刑務所に丸一年間投獄され、突撃隊の野蛮をきわめる拷問をうけ、足は萎え、両手は震え、口も殆どきけず、「殆ど生ける屍」となって、三四年二月五日にはエスターウェーゲン強制収容所に移らされた。

一九三五年一〇月、スイスの外交官で歴史家のカール・フォン・ブルクハルトは、国際赤十字から委託を受けてドイツの強制収容所を査察した。エスターウェーゲンでオシエツスキーに会う計画であった。以下は、ブルクハルトの文である。

一〇分後に二人の親衛隊員が一人の小柄な男を、連れてくるというより引きずるように担いでやってきた。彼は死人のように青ざめて震えており、感情も失っているようにみえた。目は膨れ上がり、歯は殴られて中に食い込んでいるようだった。足は傷が治っていなかった。私は彼のほうに歩み寄って手を差し出したが、彼は握らなかった。

「返答せよ」。ローリッツ（収容所長）が叫んだ。

不明瞭な微かな音が拷問を受けた男の口から漏れた。
私はローリッツに叫んだ。「下がっていてくれ」。
「フォン・オシエツキーさん」、私は話し掛けた。「貴方の友人たちの挨拶を持ってきたのです。私は赤十字の国際委員会の代表です。貴方を可能なかぎりお助けするためにやってきたのです」。
反応はなかった。私の前にまだ辛うじて生きて立っているのは、忍耐の限界に達した人間だった。返答はなかった。私はさらに近寄った。まだ見えるほうの目に涙が溢れていた。喉の奥の方からささやくように彼は言った。
「感謝します。友人たちに伝えてください。私はもうじき終わりです。もうじき。それでいいのです」。それから彼はとても微かな声で続けた。「有難うございます。ニュースは一度耳にしました。妻も一度ここを訪れました。私は平和を望んでいました」。それから再び震えがやってきた。オシエツキーは何もない収容所の広場の真ん中で、軽くうなずいた。そしてまるで報告のため軍隊的な態度をとるかのような動きをした。それから足を引きずりながら、苦しそうに一歩一歩自分のバラックに戻っていった。

オシエツスキーの運命はそれからどうなったであろうか？　三六年一月、彼はノーベル平和賞に指名された。五月、ベルリンの病院に移された。一一月末ノーベル平和賞の受賞が決定した。ナチスは受賞のためにオスロに行くことを禁じた。ゲーリングは平和主義を放棄すれば自由を与えると脅迫した。オシエツスキーは「私は平和主義者だったし、平和主義者であり続ける」と拒否した。一九三八五月三日、彼はベルリンの病院で肺結核のため死亡した。強制収容所における言語を絶する拷問による。時に、オシエツスキー四八才であった。

ナチス体制の出現によって、ドイツの知識人は態度決定を迫られた。その生きざまは次の幾つかの道に分かれよう。さまざまな分け方が考えられようが、一例として取り上げれば、脇圭平・芦津丈夫『フルトヴェングラー』(7)には、次のような分類が紹介されていた。

I　亡命

①強いられた亡命

②自由意志による亡命

II　国内に留まる

①「陶酔」：

(a)「一時的陶酔」：「一時的にぱっといかれてやがてけろっと醒めちゃう場合」。G・ベン、ハイデガー

(b)「陶酔状態の持続」：「いかれっぱなし」。

②「オポチュニスト」：

(a)「無自覚的オポチュニズム」：「圧倒的多数の一般庶民」、「長いものには巻かれろ」。

(b)「自覚的オポチュニズム」：「ナチの正体をある程度知っていながら…出世の階段をまっしぐらに昇っていく」。

③「亡命しようと思ったらそのチャンス」はある。「ナチの正体を…見抜いている」（つもり）。「しかし何らかの信念・思想的根拠」で「留まることを決意」した。フルトヴェングラー。

④「殉教者タイプ」：オシエツスキーの場合。

さて、われわれが考察しようとしているのは、上記のIIの③のフルトヴェングラーに代表される生き方である。①、②、④には名称がついているが、肝心の③には、名称がない。そこで、われわれは、結論を先取りして言えば、これを「アルカディアー Arcadia」と呼び、具体的には、いわゆる「国内亡命 Innere Emigration」あるいは「精神的抵抗」と呼ばれる態度をこの「アルカディアー」に含めることにする。

さて、「国内（精神的）亡命 Innere Emigration」という言葉を、多くの学者はごく最近まで、ドイツ敗北直後の、一九四五年八月、トーマス・マンとフォン・モーロ、フランク・ティースらとの論争の中から生まれたものと勘違いしていたようである。二例のみ挙げれば、フランツ・ショーナウアーの『第三帝国のドイツ文学』[8]は「文学の〝精神的抵抗〟の神話を粉砕する」ために書かれた書であるが、そのなかで、「精神的亡命の文学の概念が弁護という状況から出ていることが、少なくとも、この名称の正当性に疑惑をもたせる」と述べ、上記の論争に言及しているのである。「弁護という状況から出ている」という言い方は、明らかに、「戦後」に出来た言葉との意味合いをもつ。また、日本で代表的な、菊地英夫『評伝　トーマス・マン』に、「果たせるかな、ドイツ国内では、マンのこういう態度に対する敵意がにわかに燃え上がり、彼らは〝国内亡命〟という言葉を捏造してマンを先頭とする国外亡命者に対して攻撃キャンペーンを展開する」とあり、文脈から推しても、「国内亡命」なる概念は戦後の「亡命派」と「非亡命派」との論争のなかから「捏造」されたものと考えられていると判断できる。

しかし、この言葉は、実は、早くも一九三三年一一月七日のトーマス・マンの『日記』に次のように出ている。(9)

食後その雑誌の新しい号を読む。ドイツの選挙のインチキぶりと、結局私もその一員であるInnere Emigrationについての好記事。

「その雑誌の新しい号」とは『ヴェルト・ビューネ』誌の第四号（一九三三年一〇月二〇日号）のことである。この雑誌はドイツからの亡命者達がチェコのプラハで出したものであって、「好記事」とはパベル・マイスナーの「トーマス・マンの地獄行」なる記事を指す。

ところが、現在では、'Das Grosse Lexikon des Dritten Reiches" (The Encyclopedia of the Third Reich, Macmillan, 1991) の、'Innere Emigration' の項目の説明によって、この言葉の誕生がはっきりした。それは次のように説明されている。

一九三三年、ナチ掌権後ドイツに留まった作家達によって取られた反体制的立場をあらわす言葉として、フランク・ティースによって作られた。この言葉は、のち、ナチを拒否するも故国を離れようとしない全ての人に広げられた…

「国内亡命」という言葉が、いかように生まれてきたのか、この間の事情について、『ヘッセ＝マン往復書簡集』から

伺うことが出来る。とくに同書に付けられた詳細な訳注によって、この言葉を作ったというフランク・ティースの一九三三年の手紙の一部分が紹介されているので、「国内亡命」なる言葉の使われ方もよく理解できる。それによれば(同書、二七一頁)、「国内亡命」なる言葉は、フランク・ティースが「一九三三年彼の著書のいくつかが焼かれた際に彼が全国文化管理官ヒンケルにあてて送った手紙」のなかで、「非国民社会主義的文学の迫害と排斥」が続けば、「文学は結局〝国内亡命〟以外に道はない」と書き送ったというその手紙なるものの中で初めて使われたようである。「焚書」はすでに見たように、ベルリンでは一九三三年五月一〇日に起きている(ハイデルベルクとケルンでは五月一七日に、マンハイムでは五月一九日)。とすると、フランク・ティースがこの「焚書」に抗議し、「国内亡命」なる言葉を作り出したのは、遅くともこの年の五月中のことと考えていいだろう。つまり、「国内亡命」なる言葉の誕生は一九三三年五月と見て好いのではなかろうか。

「アルカディアー」とは厳しい専制的政治体制下における知識人の精神的抵抗の拠り所としての在るべき(田園の)理想郷、およびそういった拠り所をもった精神的抵抗そのものを指す。思想的範疇としての「アルカディアー」なる概念は、すでに第二章の「アルカディアーの誕生—ウェルギリウス」で述べたように、ローマ共和制最末期の詩人ウェルギリウスの『牧歌』(前三七年)に由来する。

ここで言う「厳しい専制主義体制」とは、すでに述べたように、具体的には、カール・レーベンシュタイン『新訂現代憲法論—政治権力と統治過程』[10]でいう「専制主義体制」と「全体主義体制」を指す。前者の統治類型は、ルイ一四世のような「絶対主義」、ナポレオン一世のような「人民投票的皇帝主義」、トルコのケマル・パシャのような立憲

的偽装をこらした現代の専制的体制である「新大統領制」の三つの統治類型を指し、後者の「全体主義体制」は「専制主義」の極端な形態とされるナチス体制、スターリン体制などである。

さてこの二つの体制は言論の自由が完全に封じられている「警察国家」である。しかもナチス体制の場合は人民の投票によって成立した合法的政権であり、さらに二人の内一人は悪魔的なナチス政権の支持者であり、かつ抵抗者にはその血縁者・その友人に至るまで、拷問か、強制収容所か、死かが必ず待ち受けているという恐るべき事態は、抵抗の行動を極端に困難としよう。つまり、ナチス政権下の反ナチス行動者は、国外から侵略してきた外敵に抵抗する如きの従来の抵抗方法とは全く異なる、これまで全く経験したことのない、恐るべき未知の政治闘争に直面していたのである。体制に順応しない、体制への批判者は、自己の精神活動をそのような極めて制限の強い条件下で行なわなければならない。体制への批判は、自己の生命のみならず、両親の、子供の、友人の命をも賭けるものとなる。このような苛烈な条件の中で、たとえ卑怯者と罵られようとも生き延びて、時代と対決し、批判とは直ぐに解らないような巧妙な間接的な批判を、自己の創作活動（政治活動ではなくて）を通じて行ない、時代の証言者たらんとする。

ただし、池田浩士『抵抗者たち―反ナチス運動の記録』には次のように言う。「ナチスの弾圧を招かずに、一方ではナチスの作家以上に、他方では焚書の炎以上に、人々に強く訴えるようなイソップの言葉、パルチザン的表現を創出してはじめて、国内亡命あるいは内面的亡命という概念は意味を持ってくるはずなのだ」と。しかし、池田氏のこの見解は恐らく正しくない。ここナチス体制下のドイツに在っては「イソップの寓話」でも「パルチザンのゲリラ的言論活動」でも不可能なのだ。もっと間接的な・もっと婉曲な・自己の世界観をやんわりと提示する・「人々に強く訴え

かけない」!・巧妙な遠回しの・政治性を隠した政治的な・批判的な作品の創出、こういった精神的抵抗こそが、こういった国内亡命による間接的非政治的批判の態度こそが、われわれのいう「アルカディアー」なのである。ロールズの『正義論』を援用すれば、この精神的抵抗・国内亡命は「良心的忌避 conscientious evasion」にあたろう。これは、「直接的な法的指示あるいは行政命令を暗々裏に受諾しない」と定義されているが、邦訳では evasion を「逃避」と訳している。われわれはこれを「忌避」としよう。「逃避」ではなくて、創作主体の烈烈たる、激しい精神的抵抗のあらわれであるから、全く「逃避」の心理ではないことが重要なのである。

しかし、にもかかわらず、この「アルカディアー」つまり「国内亡命」なる概念はその本質を「精神的抵抗」に置くがゆえに、明白な証拠が無いかぎり本人の申し立てに依るしかない。ヘンリー・パクターは一九三三年自分が亡命するにあたって、同志たちにこう語ったという、「無名の英雄として死ぬよりも生き残るほうがいい」、「カムフラージュするため利用できるありとあらゆる手段を用いるように」、そのために進んで、「仲間の労働者にはナチ経営細胞(NSBO)に入るように」と勧めたと。ナチス崩壊後多くのドイツ人が「自分は国内亡命者である」と自己の潔白を申し立てたという。そのため、この言葉は全く超インフレ現象をおこし、戦後ドイツでは全く軽蔑的な意味しか持たなくなってしまったともいう。以下では、それとは違った本物の(!)「国内亡命者」に付いて見ていくが、まずは「国内亡命」という概念は、このように痛く問題を孕んだ、困難な概念なのである。

〈注〉

(1) エーリッヒ・アイク『ワイマル共和国史』Ⅳ、救仁郷繁訳、ぺりかん社、一九八九、三一九、三三二頁。山口定『ヒト

ラーの台頭　ワイマール・デモクラシーの悲劇』朝日文庫、一九九一、最近までの研究成果を十分に取り入れた好著。フォン・クロージクの生卒年努力したが、不詳。

(2)　「右翼統一戦線」については栗原優『ナチズム体制の成立』ミネルヴァ書房、一九八一、五〇九頁。「その頑固頭で…」はアイク前掲書、三三三頁。パーペンや将軍達が多寡をくくっていたはウィラー＝ベネット『権力のネメシス』山口定訳、みすず書房、一九八四、二七〇頁。「三月の投降者」については、栗原前掲書、五二〇頁。

(3)　シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界』II、原田義人訳、みすず書房、一九七五、五三四頁。

(4)　H・ホォッケ、U・ライマー『ナチスに権利を剝脱された人々』山本尤他訳、社会思想社、一九九二、一五頁。

(5)　法律については、ワルター・ホーファー『ナチス・ドキュメント　一三階段への道』（救仁郷繁訳、論争社、一九六〇）、フーベルト・ロットロイトナー『法・法哲学とナチズム』（ナチス法理論研究会訳、みすず書房、一九八七）など参照。焚書については、山本尤『ナチズムと大学』（中公新書、一九八五）参照。

(6)　オシエツキーについて、彼の「チャンピオン」、「西部戦線異常なし」論については平井正『ベルリン　破局と転換の時代』（せりか書房）の二五六、三〇二頁参照。またブルクハルトの文は、ホォッケ・ライマー前掲書、二六一頁以下参照。

(7)　『フルトヴェングラー』岩波新書、一九八六、一八〇頁以下。もちろんナチス体制下での生きざまについては、この分類のほか、K・Dブラッハー『ドイツの独裁』II（山口定・高橋進訳、岩波書店、一九七五、原書一九六九、六七三頁以下）は「抵抗」に主眼をおいて、①左派、②保守派、③教会派、④市民派、⑤軍人派と分けた。山本尤『ナチズムと大学』（九八、九九頁）は、知識人・大学教授に焦点を合わせて、次の二つの分け方を紹介している。一つは、①ナチの支配体制の代弁者の役割を果たした教授たち、②体制に同調し、ないし支持を与えながら、政治的には表面に出ようとしなかった教授たち、③体制の真の性格を知りながら、学問上の野心や怯懦や日和見主義などから、時流に迎合し順応した教授たち、④政治から努めて距離をとり、学問的にも慎重に、無難な領域に閉じこもり、ときに諦観をもって生き延びようとした教授たち。もう一つの分け方は、①職業上、経済上の基盤を失いたくなかったもの、②学問上の成果の上がらないことを、ナチズムの

イデオロギーのなかで補償しようとしたもの、③業績を上げて出世しようというむきだしの功名心にとらわれていたもの、④ナチ・イデオロギーを主観的にも心底から信じていたもの。いずれにせよ、従来の研究、従来の分類法にはわれわれの言う「アルカディアー」の立場は、全く言及されていない。たかだか、たとえば、ヘンリー・パクターは『ワイマール・エチュード』（蔭山宏他訳、みすず書房、一九八九、原書一九八二、三七五頁）で、クルト・シューマッハーについて「国内亡命の最良の分を代表する」と言いながらも、これを一つの分類法の範疇として取り出してはいない。

(8) フランツ・ショーナウアー『第二帝国のドイツ文学』小川悟也訳、福村出版、一九七二、原書一九五九、引用は一七一頁。菊地秀夫『評伝　トーマス・マン』筑摩書房、一九七七、四五九頁。

(9) 以下「国内亡命」については、『トーマス・マン　日記　一九三三～一九三四』岩田行一他訳、紀伊国屋書店、一九八五、二五六頁、一九三三年一一月七日の条。山口知三『ドイツを追われた人びと―反ナチス亡命者の系譜』人文書院、一九九一、六一頁。『ヘッセ＝マン往復書簡集』青柳謙二他訳、筑摩書房、一九八五、一二九～三六、二七一～七三頁。ハンス・ロートフェルス『第三帝国への抵抗』片岡啓治他訳、弘文堂、一九六三、原書一九五八、四六頁。ハンナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン』大久保和郎訳、みすず書房、一九六九、原書一九六三、八二、八三頁。クラウス・マン『転回点―マン家の人々』小栗浩他訳、晶文社、一九八六、原書一九五〇、四四二頁。スチュアート・ヒューズ『大変貌　社会思想の大移動　一九三〇～一九六五』荒川茂男他訳、みすず書房、一九八〇、原書一九七五、一三頁。

(10) レーベンシュタイン『新訂　現代憲法論―政治権力と統治過程』山川雄巳他訳、有信堂、一九八六、六九頁以下。池田浩士『抵抗者たち―反ナチス運動の記録』TBSブリタニカ、一九八〇、一五三頁。ロールズ『正義論』矢島鈞次他訳、紀伊国屋書店、一九七五、二八六頁。ヘンリー・パクター『ワイマール・エチュード』蔭山宏他訳、みすず書房、一九八九、三四一頁。